

養育者における育児語使用傾向の構造と 育児語使用を規定する要因

村瀬 俊 樹*・小 椋 たみ子**・山 下 由紀恵**

Baby-talk words in Japanese parents: Structure and motivation for use

Toshiki MURASE, Tamiko OGURA, & Yukie YAMASHITA

キーワード：入力言語，乳児，言語獲得，月齢変化，日本語

日本という社会—文化的環境の中で、子どもたちは、どのようにことばや認知を発達させていくのだろうか。言語・認知発達研究においては、生得的要因あるいは遺伝的要因と、経験的要因あるいは環境的要因の役割が繰り返し議論されてきた。生得的あるいは遺伝的要因については、今日では、立場の違いはあっても、何らかの生得的能力を仮定せざるを得ず、生得的なものとして何らかの内容をもった制約を想定すべきなのか、注意統計学習能力といった汎用的な学習能力を想定すべきなのかといった立場の違いが見られる（吉田，2006）。一方、言語発達に関する経験的あるいは環境的要因の役割については、これまで、養育者のことばの役割が注目されてきた。また、文化心理学の研究は、北米の人たちの認知と日本を含む東アジアの人たちの認知の比較研究を蓄積してきており（Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001）、子どもの言語・認知発達に対する社会—文化的環境の役割について注目が向けられている。ここで、子ども

にとっての社会—文化的環境とは、子どもがそこで育つ子どもにとって意味のある環境であり、自然的・物理的・社会的環境を含むが、それらはその社会において歴史的に蓄積されてきた相互作用パターンや象徴レベルでの人々の考えや理解のあり方で色づけされたものであるとする。

子どもを取り巻く社会—文化的環境は、その社会で歴史的に構成されてきた言語的・画像的シンボルで、その自然的・物理的・社会的環境が色づけられていると考えられる。本論は、言語的シンボルの一側面としての養育者のことばに焦点を絞り、その中でも、子どもに対して特別によく使われる語として定義される育児語（村田，1960）を取り上げて検討することとする。

養育者が乳幼児に向けて話すことばは、成人に向けて話すことばとその特徴が異なることから、対乳幼児音声（Infant Directed Speech: IDS, Child Directed Speech: CDS）と呼ばれて研究されてきた。IDS/CDSは、様々

*島根大学法文学部

**神戸大学文学部

***島根県立大学短期大学部

な次元で成人に向けて話すことばとの違いが見られると指摘されている。平均ピッチが高いことやピッチの変動幅が大きいこと、ゆっくりとしたテンポ等の韻律的特徴、複雑な文や従属節が少ないなどの統語的特徴、冗長で繰り返しが多いなどの談話的特徴、現前の文脈に言及しているなどの意味的特徴、子どもに対して特別な語が使われるなどの語彙的特徴などである (Garton, 1992; Pine, 1994)。近年では、ことばだけでなく、養育者が音声も動作も含めて子どもにどのように関わるのかという観点からの研究が進められており、乳幼児に向けた動作は、IDS/CDSの特徴と同様に単純化、反復性、変動幅の大きさという特徴を持ち、子どもの月齢とともに、音声に動作を伴わせる度合いも異なることが明らかにされている (Brand, Baldwin, & Ashburn, 2002; Gogate, Bahrick, & Watson, 2000)。

日本の養育者が子どもに向けて話すことばも、先述したIDS/CDSの特徴を有しているが、日本の養育者において特徴的なことは、子どもに対して特別な語 (育児語) を使用することが顕著であるということである。育児語には、擬音語擬態語の使用、音韻の反復、語の般用傾向、接尾辞「さん」・「ちゃん」・「くん」を付加する傾向、接頭辞「お」を付加する傾向、音の転用や省略などがその特徴として挙げられる (早川, 1981; 村田, 1960; Toda, Fogel, & Kawai, 1990; 友定, 2005)。米国の養育者と比較した研究では、0歳代から1歳代にかけて、日本の養育者の方がこれらの特徴を持つ語を用いる傾向が強かった (Fernald & Morikawa, 1993; 小林, 1986; Toda, et al., 1990)。

育児語の使用以外にも、日本と北米における養育者が乳幼児と話すときの発話には、様々な違いがあることが報告されてきた。日本の

母親が乳幼児に向けて話すことばには、北米の母親が乳幼児に向けて話すことばよりも、質問が少ない (Bornstein, et al., 1992; Fernald & Morikawa, 1993; Minami & McCabe, 1995; Toda, et al., 1990)、日本の母親の方が、物の受け渡しなどの社会的ルーティンに関する発話や、感嘆詞やあいづちの発話が多い (Fernald, & Morikawa, 1993; Minami & McCabe, 1995) といったことである。これらの特徴から、日本の養育者が乳幼児に向けて話すことばは北米の養育者が乳幼児に向けて話すことばよりも、情緒志向性が高く、情報志向性が低いと考えられてきた (Fernald & Morikawa, 1993; Rothbaum, Pott, Azuma, Miyake, & Weisz, 2000)。

それでは、日本の養育者が使用する様々な種類の育児語の使用傾向の間には、何らかの関連性があるのだろうか。たとえば、動物に対して擬音語擬態語を使う傾向の高い養育者は、乗り物や動作に関しても擬音語擬態語を使う傾向が高いのだろうか。動物に対して、接尾辞の付加を行う傾向の高い養育者は、乗り物や動作に関して擬音語擬態語を使う傾向が高いのだろうか。これまで、ことばの形態・機能・意味・発生上の特徴から育児語の分類がなされてきたが (早川, 1975)、使用の観点から、育児語の構造を明らかにすることはなされていない。本研究では、日本の養育者における、育児語使用の構造を明らかにすることを第1の目的とする。

次に、これらの育児語はどのような要因によってその使用が規定されているのだろうか。養育者は子どもにあわせて、発話を敏感に調節 (fine tuning) しているのかどうかという問題意識から、英語話者における養育者のことばの統語的特徴や意味的特徴が、1歳代から2歳代という初期言語発達期に、子どもの月齢

や言語発達と関係して変化するののかということが検討されてきた (Snow, 1977)。その結果は、子どもの月齢や言語発達によって養育者のことばの特徴が変化するという結果も見られるが、変化しないという結果もあり、必ずしも一貫したものではない (Chapman, 1981; Pine, 1994)。

英語話者に関する研究では、語彙的特徴である育児語についてはあまり注目されていないが、育児語を語彙として豊富に持つ日本語話者の場合は、育児語の使用が子どもの月齢や言語発達と関連しているのかどうかを検討する必要がある。小椋・吉本・坪田 (1997) は、2名の母親に関して、子どもが1歳代に擬音語擬態語の使用を減少させていることを明らかにしている。しかし、育児語の研究はデータの蓄積が少ないため、育児語の使用傾向が、子ども側の変数とどのような関係を示すのかということについて、十分には明らかにされていない。そこで、本研究では、養育者の育児語使用傾向が、1歳代から2歳代にかけて、子どもの月齢によって減少するのかどうかを明らかにすることを第2の目的とする。

また、本研究では、子どもの出生順位や性別といった人口統計学的変数が養育者における育児語使用傾向と関連性があるのかどうかについてもあわせて検討し、養育者における育児語の使用傾向を規定する要因を探ることとする。

なお、本研究は、すでに村瀬・小椋・山下 (1992, 1998) において発表されたものを分析し直し、新たな分析を付け加えたものである。特に村瀬・小椋・山下 (1998) とは分析方法は異なるものの、主要な発見は重なる部分も多い。使用した項目の詳細や項目ごとのデータについては、これらの論文を参照されたい。

方 法

調査対象

松江市内の保育所に通う8ヶ月～36ヶ月の子どもを持つ母親670名を調査対象とした。その内、本研究では、16ヶ月～27ヶ月291名分のデータを分析対象とした

調査方法

The MacArthur Communicative Development Inventories 1989年版を日本語に翻訳・改変した初期言語発達インベントリ第1版 (小椋・山下・村瀬, 1991) の語彙チェックリストに、母親の使用語を記入する質問を付け加え、母親に配布し、記入を求めた。質問紙の語彙チェックリストに挙げられている通りの言い方を母親がしているときには、「」の印をつけるように求め、そうでない場合は、その言い方を記入するよう求めた。語彙チェックリストは、19領域475項目で構成されているが、本研究では、その内、比較的早期から母子が使用する頻度が高いと思われる8領域256項目 (動物の名前34項目、乗り物12項目、食物と飲物49項目、衣類19項目、体の部分22項目、日課とあいさつ24項目、動詞54項目、性質42項目) を取り上げて、子の月齢による母親の使用語の変化を検討した。また、調査用紙のフェイスシートには、子どもの性別、兄弟姉妹の人数を尋ねる項目があった。本研究では、兄弟姉妹の人数は、兄または姉がいるかどうかだけを取り上げ、兄または姉がいない場合は第1子、兄または姉がいる場合は第2子以降とした。調査は1989年～1990年に実施した。

育児語使用傾向尺度

それぞれの母親がどの程度育児語を使用しているのかに関する尺度を構成するにあたり、調査項目が多かったため、記入されていない

項目が多く見られるという問題があった。そのため、すべての項目を分析対象とすることはせず、以下の手順で育児語使用傾向尺度を構成していった。

記入漏れが少なく育児語が使用される割合の高い項目の選定 第1段階のセクションとして、記入漏れが少なく、育児語が用いられる割合が比較的高い項目を選んだ。動物、乗り物、食物と飲物、衣類、体の部分については、18ヶ月以降の各月齢の母親群で、有効回答者の割合が2/3以上であった項目を選んだ。日課とあいさつ、動詞、性質については有効回答者の割合が低かったため、18ヶ月以降の各月齢の母親群で、有効回答者の割合が1/2以上であった項目を選んだ。

これらの項目について、どのような語が使用されているか検討したところ、擬音語擬態語、音韻反復、接尾辞の付加、接頭辞の付加、音の転用、音の省略、般用という7つの特徴が認められた。擬音語擬態語は、動物の鳴き声や音・様態の音象徴であるもの(例:「ワンワン(犬)」,「ポーン(投げる)」)である。音韻反復は、音韻が繰り返されているもので、擬音語擬態語であるものもそうではないものも含む。語尾の長音、促音、撥音が省略されているものも含み、語頭や語尾に音の付加したのものも含む(例:「カミカミ(かむ)」,「ニャーニャ(猫)」)。接尾辞の付加は、「サン」・「チャン」・「クン」及びその変形、「コ」・「ペ」などを含む(例:「クマサン(熊)」,「ワンチャン(犬)」)。接頭辞の付加は、「オ」の付加されたものである(例:「オサカナ(魚)」)。音の転用は、成人語の一部の音が変形したもの(例:「ペソ(へそ)」,「ニューニュ(牛乳)」)。音の省略は成人語の一部の音が省略されているもの(例:「ヤダ(いやだ)」)。般用は成人における使用よりもその適

用範囲が広いものである(例:「マンマ(ケーキ)」)。

次に、各項目別に、記入された母親の使用することばが、これらの7つの育児語の特徴を持つのかどうかを評定した。評定に際しては、ダブルコーディングを行った。例えば、手に対して「オテテ」ということばを使用している母親は、接頭辞の付加とも評定され、音韻反復とも評定された。

全月齢を込みにして、育児語の各特徴を持つことばを使用している母親が有効回答者に占める割合がいずれも5%未満であった項目は、育児語が使われる割合が低いと判断されるため、除外された(なお、虫はこの基準を満たしてはいるが、基準を満たした他の動物の名前と比較して育児語の使用が少なかったため除外した)。

育児語使用傾向尺度の構成 第1段階のセクションで選ばれたチェックリストの項目は記入漏れが少なく、育児語が使われる割合が比較的高いものである。これらの項目を用いて育児語使用傾向の尺度を作るため、項目の意味領域と用いられる育児語の特徴の組み合わせ別に尺度を構成した。

意味領域としては、インベントリーの意味領域を基としているが、日課とあいさつ・動詞・性質は、いずれも述語的に用いられているため、これらの意味領域は合併して動作と状態とし、動物、乗り物、飲食物、衣類、身体、動作と状態という6つの意味領域が設定された。

各意味領域で、7つの育児語の特徴を持つ語のそれぞれの使用率が全月齢込みで5%以上となるチェックリスト項目をリストアップし、項目が複数見られる意味領域—育児語特徴を分析対象とした。それぞれの意味領域—育児語特徴ごとに、リストアップされた全ての項

目に対して欠損値を持たない母親を、その意味領域—育児語特徴の分析対象とした。各項目と、その意味領域—育児語特徴における当該項目を除く全項目の育児語使用総点との相関関係を調べ、最も相関係数の低い項目から順に除外してゆき、尺度を構成した。各項目がすべて総点と相関係数0.4以上の関連を示すところで項目の除外を打ち切った。 α 係数が0.7未満の尺度は除外し、最終的に構成された育児語使用傾向の尺度(カッコ内に、尺度を構成するチェックリスト項目と α 係数を示す)は、動物—擬音語擬態語(いぬ・ねこ・牛・ぶた・とり・うさぎ, $\alpha=0.86$)、動物—音韻反復(いぬ・ねこ・牛・ぶた・とり・さかな・うさぎ, $\alpha=0.86$)、動物—接尾辞付加(うさぎ・象・くま・とり・ねこ・ぶた・牛, $\alpha=0.81$)、乗り物—擬音語擬態語(車・汽車・自転車, $\alpha=0.74$)、乗り物—音韻反復(車・汽車・自転車, $\alpha=0.75$)、飲食物—擬音語擬態語(うどん・スパゲッティ, $\alpha=0.90$)、飲食物—音韻反復(うどん・おつゆ・スパゲッティ・みそしる, $\alpha=0.75$)、飲食物—接頭辞付加(とうふ・みず, $\alpha=0.71$)、衣類—音韻反復(くつ・長靴, $\alpha=0.71$)、身体—接頭辞付加(口・目・手・鼻・かお, $\alpha=0.84$)、動作と状態—擬音語擬態語(泣く・なげる・かむ・たたく, $\alpha=0.73$)、動作と状態—音韻反復(あらう・泣く・あつい・かむ・

ねる・お風呂・きれいにする・たたく, $\alpha=0.81$)であった。

上記12の尺度には、33項目が使われているが、それら33項目のすべてに記入漏れのない104名のデータを以降の分析対象とした(Table 1)。それぞれの尺度について、それを構成する項目のうち、育児語が使われる項目の割合を各調査対象者ごとに算出し、育児語の使用割合とし、以下の分析に用いた。

結 果

上記12の意味領域—育児語の特徴における育児語使用傾向の構造を調べるため、主成分分析を行った。

これらの12の意味領域—育児語特徴における育児語使用割合を変数として、104名の母親のデータを用いて、主成分分析を行った結果、解釈可能な2つの主成分が抽出された(固有値は、それぞれ5.40, 1.65)。プロマックス回転後の各変数の各主成分への負荷量をTable 2に示す。

第1主成分は各意味領域での擬音語擬態語の使用、音韻反復の使用に負荷量が高い。したがって、擬音語擬態語・音韻反復の主成分と考えることができる。第2主成分は動物—接尾辞付加、飲食物—接頭辞付加、身体—接頭辞付加の因子負荷量が高く、接辞付加の主成分と考えることができる。

Table1. 研究1 分析対象者数

	子の月齢						合計
	16-17ヶ月	18-19ヶ月	20-21ヶ月	22-23ヶ月	24-25ヶ月	26-27ヶ月	
男児	6	8	5	11	11	13	54
女児	4	8	10	8	8	12	50
第1子	3	5	5	10	8	10	41
第2子以降	7	11	10	9	11	15	63
合計	10	16	15	19	19	25	104

Table2. 意味領域ごとの育児語使用割合主成分分析結果 (Promax 回転後負荷量)

	I	II
乗物—擬音語擬態語	0.80	0.07
動物—音韻反復	0.79	0.18
乗物—音韻反復	0.77	0.08
動作と状態—音韻反復	0.76	-0.06
動物—擬音語擬態語	0.76	0.23
飲食物—音韻反復	0.76	-0.19
飲食物—擬音語擬態語	0.75	-0.24
衣類—音韻反復	0.73	0.05
動作と状態—擬音語擬態語	0.69	-0.08
飲食物—接頭辞付加	-0.27	0.85
動物—接尾辞付加	0.10	0.72
身体—接頭辞付加	0.10	0.63
因子間相関	0.27	

擬音語擬態語と音韻反復は「ワンワン」などのように重複している場合が多い。そこで、擬音語擬態語と音韻反復を合併した尺度を作って、その尺度における育児語使用割合を用いた場合の主成分分析を行った。すなわち、各意味領域ごとに、擬音語擬態語か音韻反復かどちらかの尺度に含まれている項目について、擬音語擬態語、または、音韻反復である場合は育児語の使用とみなして、動物—擬音擬態音韻反復 ($\alpha=0.88$)、乗物—擬音擬態音韻反復 ($\alpha=0.74$)、飲食物—擬音擬態音韻反復 ($\alpha=0.75$)、動作と状態—擬音擬態音韻反復 ($\alpha=0.84$) の尺度を作り (カッコ内は各尺度における信頼性係数)、衣類—音韻反復、動物—接尾辞付加、飲食物—接頭辞付加、身体—接頭辞付加とともに、育児語使用割合の値をもとに主成分分析を行った。その結果、尺度を合併しない場合と同様の主成分を得た (固有値は、それぞれ 3.38, 1.55; Table 3)。

次に、合併後の尺度を用いた主成分分析の第1主成分に負荷量の高かった動物—擬音擬態音韻反復、乗り物—擬音擬態音韻反復、飲食物—擬音擬態音韻反復、衣類—音韻反復、

動作と状態—擬音擬態音韻反復を従属変数とし、子どもの月齢×子どもの性別 (男児・女児) ×出生順位 (第1子・第2子以降) を独立変数とする多変量分散分析を行った。子どもの月齢要因は各月齢の分析対象者数が少ないので、2月齢を合併し、16・17ヶ月、18・19ヶ月、20・21ヶ月、22・23ヶ月、24・25ヶ月、26・27ヶ月という6水準で分析した。性別については主効果もそれを含ま交互作用も見られなかったため、子どもの月齢×出生順位で再度多変量分散分析を行い Wilks の基準によった結果、子どもの月齢の主効果、出生順位の主効果が見られた ($F(25,328.41)=2.54, p<.001; F(5,88)=3.54, p<.01$)。個別的分析では、飲食物—擬音擬態音韻反復を除くすべての尺度において、月齢の主効果が見られた (動物—擬音擬態音韻反復, $F(5,92)=5.79, p<.001$; 乗物—擬音擬態音韻反復, $F(5,92)=2.83, p<.05$; 衣類—音韻反復 $F(5,92)=5.14, p<.001$; 動作と状態—擬音擬態音韻反復, $F(5,92)=3.53, p<.01$)。Tukey 法による多重比較の結果、動物は 26・27ヶ月児に対しては他の月齢児に対してよりも擬音擬態音

Table3. 擬音語擬態語と音韻反復を合併した場合の意味領域ごとの育児語使用割合主成分分析結果 (Promax 回転後負荷量)

	I	II
動物—擬音擬態音韻反復	0.81	0.09
乗物—擬音擬態音韻反復	0.80	-0.03
衣類—音韻反復	0.78	0.07
動作と状態—擬音擬態音韻反復	0.77	0.01
飲食物—擬音擬態音韻反復	0.77	-0.11
飲食物—接頭辞付加	-0.25	0.86
動物—接尾辞付加	0.14	0.74
身体—接頭辞付加	0.16	0.65
因子間相関	0.23	

韻反復の使用割合が低く、動作と状態は 26・27ヶ月児に対しては 16・17ヶ月児や 20・21ヶ月児よりも擬音擬態音韻反復の使用割合が低く、乗物は 26・27ヶ月児に対しては 16・17ヶ月児よりも擬音擬態音韻反復の使用割合が低かった。衣類は 16・17ヶ月児に対しては 22ヶ月以降の子どもに対してよりも音韻反復の使用割合が高く、20・21ヶ月児に対しては 22・23ヶ月児や 26・27ヶ月児よりも音韻反復の使用割合が高かった。20・21ヶ月児に対しては、18・19ヶ月児に対してよりもむしろ擬音擬態語・音韻反復の使用割合が高い傾向はあ

るが、全体としてみると、子の月齢の増大とともに擬音語擬態語・音韻反復の使用が減少しているといえる (Figure 1)。

また、出生順位の個別分析では、動物についての擬音擬態音韻反復、衣類についての音韻反復で主効果が見られ ($F(1,92)=4.36, p<.05; F(1,92)=9.49, p<.01$)、第2子以降に対しての方が第1子に対してよりも擬音語擬態語・音韻反復が使われる傾向があった (Figure 2, Figure 3)。

第2主成分に負荷量が高かった動物—接尾辞付加、飲食物—接頭辞付加、身体—接頭辞

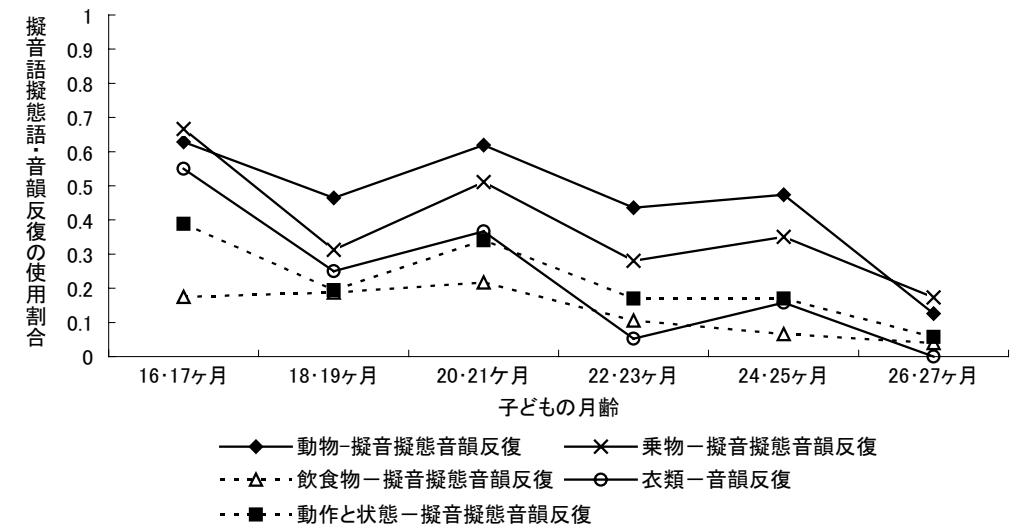


Figure1. 子の月齢による擬音語擬態語・音韻反復使用の割合

付加についても、同様に、子どもの月齢×子どもの性別（男児・女児）×出生順位（第1子・第2子以降）を独立変数とし、多変量分散分析を行った。性別については主効果もそれを含む交互作用も見られなかった。子どもの月齢×出生順位で再度多変量分散分析を行いWilksの基準による結果、子どもの月齢の主効果、子どもの月齢×出生順位の交互作用が見られた ($F(15, 248.85) = 2.42, p < .01$; $F(15, 248.85) = 2.55, p < .01$)。個別的分析では、動物の接尾辞付加と身体

の接尾辞付加に月齢の主効果が見られ ($F(5, 92) = 2.72, p < .05$; $F(5, 92) = 5.51, p < .001$)、Tukey法による多重比較の結果、動物については、16・17ヶ月児に対しては26・27ヶ月児に対してよりも接尾辞を付加する割合が高く、身体については20・21ヶ月児に対しては18・19ヶ月、22・23ヶ月、26・27ヶ月児に対してよりも接尾辞を付加する割合が高かった。接辞付加に関しても、20・21ヶ月児に対しては、18・19ヶ月児に対してよりもその割合が高い傾向はあるが、全体としてみる

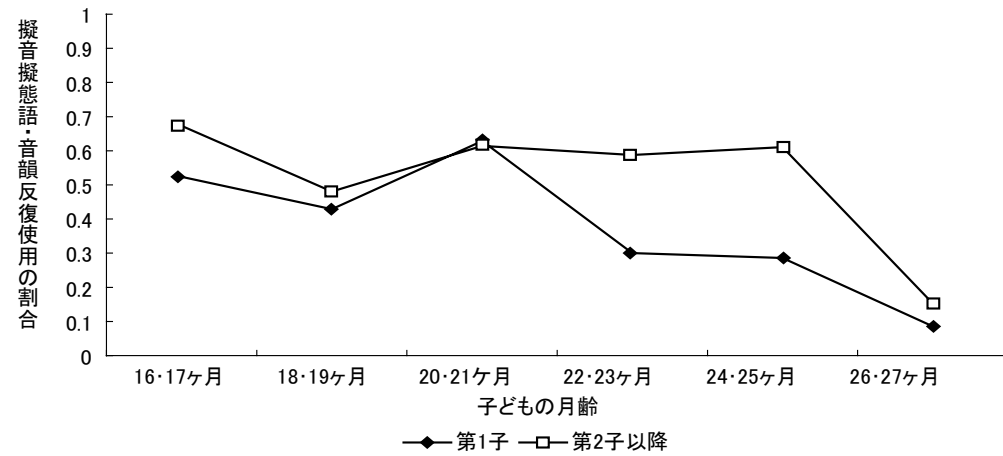


Figure 2. 動物—擬音語擬態語・音韻反復の割合

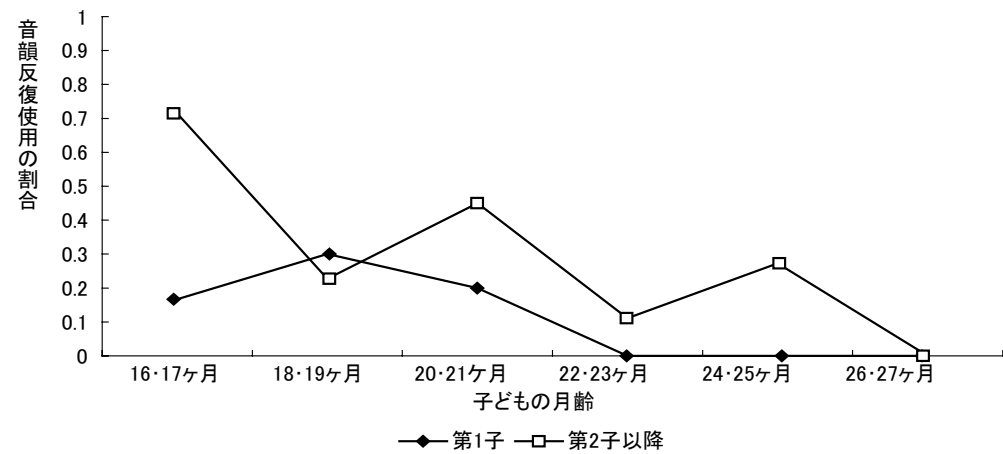


Figure 3. 衣類—音韻反復の割合

と、子の月齢の増大とともに接辞付加の割合が減少しているといえる (Figure 4)。

子どもの月齢と出生順位の交互作用については、身体に対して接頭辞を付加する傾向が、16・17ヶ月児については第2子以降の子に対しての方が、20・21ヶ月児については第1子に対しての方が高く、飲食物に接頭辞を付加する傾向は21ヶ月児までは第1子に対しての方が高いが、22ヶ月以降は出生順位の差は見られないという結果が見られるが、この結果の解釈は困難であるので、以下の議論には含めないこととする。

考察

育児語使用の構造

本研究の結果、松江市という限定はあるものの、日本語を母語とする母親は、擬音語擬態語、音韻の反復、接尾辞の付加、接頭辞の付加、般用、音の省略、音の転用という特徴を持つ育児語を使用していることがわかった。また、育児語の言及対象・事象は、動物だけに限らず、乗り物、飲食物、衣類、身体各部、動作、性質など様々な対象・事象におよんでいた。これらの結果は、従来の結果と同様の

ものである。

これらの育児語の使用傾向の構造については、擬音語擬態語の使用や音韻の反復をする傾向が、特定の言及対象・事象の意味領域だけではなく、動物名称・乗り物・飲食物・衣類・動作と状態など、様々な意味領域にわたって関連していることが明らかとなった。また、それとは弱い正の相関を示すが、別の成分として、接頭辞の「お」、接尾辞の「さん」・「ちゃん」など、成人語に接辞を付けた育児語を用いる傾向が見られることが明らかとなった。

育児語使用の規定要因

母親の育児語使用傾向は、擬音語擬態語の使用や音韻の反復をする傾向、動物に接尾辞を付加したり身体に接頭辞を付加する傾向について、子どもの月齢の増大とともに減少していくことが明らかとなった。子どもの月齢の増大は、子どもの言語発達や認知発達と連動している。小椋・村瀬・山下 (1992) は、動物の名前・乗り物・おもちゃ・飲食物をあわせた語彙数の増大が、21ヶ月から24ヶ月にかけて著しいことを報告している。小椋ら (1991) では、多語文の発話、過去や将来のこ

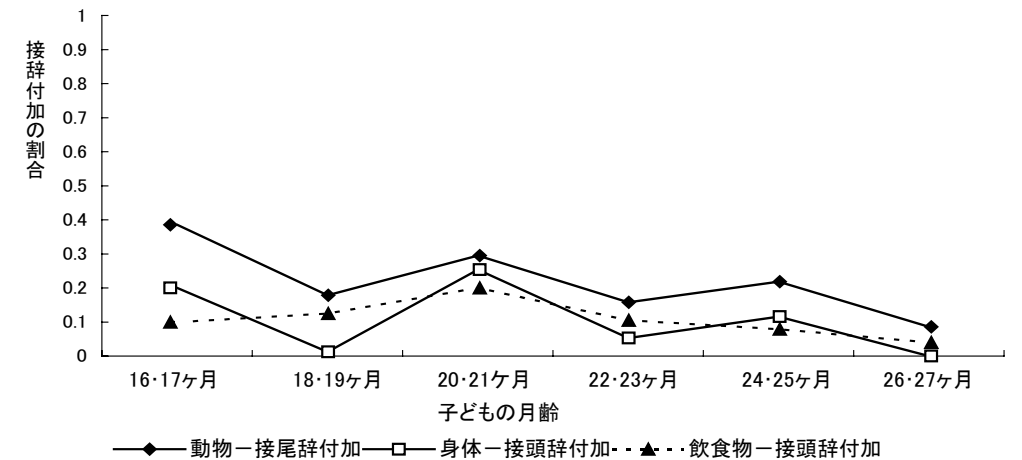


Figure 4. 子の月齢による接辞付加の割合

とに関する発話をする子の割合もこの時期に増大している。小椋ら(1997)は、子どもの手段目的課題・記憶課題の通過や統語段階と母親の育児語使用の減少の時期の関係から、母親の育児語使用の減少が子どもの側の統語発達、認知能力の発達により引き起こされたのではないかと考察している。本研究では、これらの子の側の変数と母親の育児語使用傾向との直接的な関連性を検討していないので、母親の育児語使用の程度の減少が、子どもの月齢で表される全体としての発達についての母親の認知によってもたらされるのか、言語発達や認知発達といった子どもの特定の能力についての母親の認知によってもたらされるのか明確なことは言えないが、また、どの程度敏感に調整しているのかということについてはわからないが、1歳代から2歳代という初期言語獲得期において、日本の母親は子どもに対して使用する語彙を調整しているといえる。

本研究のデータでは、20・21ヶ月児の母親は18・19ヶ月児の母親よりも育児語を使用する傾向がむしろ高かった。このことは、子どもの月齢の増大による母親の育児語の使用の減少は、単調な減少傾向とはいえず、語彙が増大する20・21ヶ月頃には一時的に増大する可能性も否定はできない。ただ、小椋ら(1997)ではそのような傾向は見られない。分析対象となったサンプル数が少ないので、今後、多数のサンプルを用いてこの点を検討することが必要である。

子どもの性別による育児語の使用傾向に違いは見られなかったが、出生順位については、第2子以降の子どもに対しての方が、動物に擬音語擬態語や音韻反復の形式を持つ語を使用する傾向が高く、衣類に対して音韻反復の形式を持つ語の使用傾向も高かった。このこ

とは、第1子で子育てを経験したことが、育児語の使用傾向を高めている可能性が考えられる。しかし、兄や姉が保育園などで育児語の使用を学習し、それを家庭でも使用することが母親に育児語の使用を促している可能性もあり、単に育児経験とは結論づけられない。

育児語研究の今後の課題と展開

それでは、養育者はどうして育児語を使用するのだろうか。早川(1981)は、育児語の特徴それぞれを考察し、音韻反復は音声操作の獲得において、般用は表象・概念形成において、擬音語擬態語はシンボルの形成において重要な役割を果たすと考察している。この考えに立つと、音韻反復は反復喃語の延長として子どもにとって学習しやすい、擬音語擬態語は能記と所記が類似しておりその関係が捉えやすい、般用に見られるような概括化傾向の方が初期言語の獲得期の子どもにとっては捉えやすいということから、育児語語彙の使用は初期言語獲得期の子どもの言語獲得に有利に働く可能性が考えられる。

実際、IDS/CDSの韻律的特徴については、乳児におけることばの知覚に影響を与えることが明らかにされている。月齢による違いもあるが、乳児は、IDS/CDSの韻律的特徴を持つ音声に対しての方が、成人へ向けたことばの韻律的特徴を持つ音声よりも選択的に聴取する(Cooper & Aslin, 1990; Hayashi, Tamekawa, & Kiritani, 2001)。また、6~8ヶ月児は、IDS/CDSの韻律的特徴で無意味語からなる文が与えられた方が、成人に向けて話すことばの韻律的特徴でそれらが与えられるよりも、音節の連続確率に関する情報に基づいて、その文から語の抽出がしやすいことが明らかになっている(Thiessen, Hill, & Saffran, 2005)。育児語についても、日本語の育児語に特徴的なリズム構造を持つ語に対して、乳児は選好

聴取することがわかっている(林・近藤・馬塚, 2001)。一方、Markman(1989)の述べるように、語彙の獲得において相互排他性原理を子どもが適用しているとすると、成人語と異なる語彙の使用は、いずれ成人語を獲得する際にその原理を乗り越える必要が生じ、子どもに負荷を与えることも考えられる(Murase & Ogura, 2006)。ここで問題とすべきことは、養育者が、育児語を用いることは、子どもの語彙獲得にとって促進要因として働いていると考えているのか、妨害要因として働いていると考えているのかという素朴理論と育児語使用傾向との関連性である。養育者が子どもや子どもの発達に関して持っている素朴理論と育児語使用傾向の関連性が明らかにされれば、養育者が育児語を使用する動機が明らかになると考えられる。

一方、成人語に接辞を付加する傾向についてはどうだろうか。接頭辞、接尾辞の付加は、その多くが育児語の拍数として最も多い3拍または4拍(早川, 1975)化する働きを持っており(「オメメ」「オクチ」「ウサチャン」「クマチャン」など)、そのことが、子どもにとって獲得しやすいことばの形態と養育者に見なされる可能性があるが、それ以外には子どもの言語獲得を容易にすると養育者に認知される可能性は特に考えられない。そのため、成人語に接辞を付加することには、言語獲得のしやすさに関する養育者の認知とは異なる養育者の心理変数を推測する必要があると考えられる。Ferguson(1977)は、接辞の付加に関しては、養育者が情緒的要素を付加するという表出的・同一化の過程によって生じていると考えている。日本の養育者は情緒的コミュニケーションの確立に重きを置いていることが指摘されており(Fernald & Morikawa, 1993; 小林, 1986; 小椋ら, 1997)、養育者が

子どもの心性に対して一体化するという感情的変数が接辞付加の傾向と関連している可能性が考えられる。接辞の付加についても、養育者の子どもへの情緒的一体化の重視という傾向と関係があるのかどうか、実証的な研究が必要である。

接尾辞の付加については、子どもたちの概念形成に対する影響を考えることも今後の課題である。本研究では、ある程度の人数が複数以上の項目に対して接尾辞を付加している意味領域は動物のみであり、動物のみが分析対象になったが、日本の養育者は無生物や植物に対しても、子どもに対しては接尾辞の付加をよく行う(「にんじんさん」「お月さん」など)。これは、日本の子どもたちに対しては、無生物のもつ知覚特徴や植物のもつ知覚特徴が、言語的シンボルにおける人間の特徴(接尾辞)と高い相関関係を持って与えられるということである。

日本語は助数詞言語の一つであり、生物(動物)に対して用いられる助数詞と無生物に対して用いられる助数詞が異なることが指摘されてきた(Lucy & Gaskins, 2003; 佐藤・針生, 2006)。また、日本語は生物(動物)に対して用いる動詞と無生物に対して用いる動詞が異なることから、生物(動物)と無生物を区別する言語と考えられている(Yoshida & Smith, 2003)。

しかしながら、子どもに対する運用上の言語という点で考えると、このような生物(動物)と無生物との区別は維持しつつも、接尾辞の付与によって生物(動物)も無生物も全体として擬人化する傾向が高いことが日本の子どもにとっての社会・文化的環境の特徴であることが指摘できる。このことは、日本の子どもたちの概念発達の特徴を考えるとときに示唆的である。これまでの認知発達研究で、

日本の子どもの方がアメリカの子どもよりも無生物に動物的属性を付与する傾向が高く、生物（動物）か無生物かあいまいな対象を生物（動物）とみなす傾向が高いことが明らかにされている（Hatano et al., 1993; Yoshida & Smith, 2003）。Yoshida & Smith (2003) では、日本語では生物（動物）と無生物を区別する助数詞や動詞などの言語的シンボルの付加によって、生物（動物）的特徴に注意が向けられやすくなることによってこのことを説明していた。しかし、これに対立する仮説として、日本の子どもにとっての社会—文化的環境では、そもそも無生物的知覚特徴や植物的知覚特徴と、言語的シンボルによって提供される人間的特徴の相関関係が高く、このことが日本の子どもたちにおける生物概念の特徴を形作る要因になっている可能性がある。現時点では、どちらの考えが正しいか決定することはできないが、この点において、育児語の研究は、生物概念の発達における文化的要因の検討へと発展する可能性を持っている。

育児語は日本の子どもにとっての社会—文化的環境の側面である。今後、日本の子どもに対する様々な言語的・画像的シンボルの特徴を明らかにし、子どもがことばや認知を発達させていく条件を明らかにするとともに、子どもがその環境から何をどのように取り入れていくのか、そして、環境にどのように適応していくのかを明らかにしていく必要がある。

引用文献

Bornstein, M. H., Tal, J., Rahn, C., Galperin, C. Z., Pecheux, M-G., Lamour, M., Toda, S., Azuma, H., Ogino, M., & Tamis-LeMonda, C. S. (1992). Functional analysis of the contents of maternal speech to infants of 5 and

13 months in four cultures: Argentina, France, Japan, and the United States. *Developmental Psychology*, 28, 593-603.

Brand, R., J., Baldwin, D. A., & Ashburn, L. A. (2002). Evidence for 'motionese': Modifications in mothers' infant-directed action. *Developmental Science*, 5, 72-83.

Chapman, R. S. (1981) Mother-child interaction in the second year of life. In Richard L. Schiefelbusch, & Diane D. Bricker (Eds.) *Early Language Acquisition and Intervention* (pp.201-250). Baltimore: University Park Press.

Cooper, R. P., & Aslin, R. N. (1990). Preference for infant-directed speech in the first month after birth. *Child Development*, 61, 1584-1595.

Ferguson, C. A. (1977). Baby talk as a simplified register. Snow, C. E. & Ferguson, C. A. (Eds.) *Talking to children* (pp. 209-235). New York: Cambridge University Press.

Fernald, A., & Morikawa, H. (1993). Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, 64, 637-656.

Garton, A. F. (1992). *Social Interaction and the Development of Language and Cognition*. Lawrence Erlbaum Associates Ltd., Hove, U. K.

Gogate, L. J., Bahrick, L. E., & Watson, J. D. (2000). A study of multimodal motherese: The role of temporal synchrony between verbal labels and gestures. *Child Development*, 71, 878-894.

Hatano, G., Siegler, R. S., Richards D.D., Inagaki, K., Stavy, R., & Wax, N. (1993). The development of biological knowledge: A

multi-national study. *Cognitive Development*, 8, 47-62.

早川勝広 (1975) 育児語研究の諸問題 (上). *文教国文学*, 3, 1-14.

早川勝広 (1981) 育児語と言語獲得. *言語生活*, 351, 50-56.

林安紀子・近藤公久・馬塚れい子 (2001). 乳児における語のリズム構造への反応. *電子情報通信学会技術報告*, 101, 25-31.

Hayashi, A., Tamekawa, Y., & Kiritani, S. (2001). Developmental change in auditory preferences for speech stimuli in Japanese infants. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 44, 1189-1200.

小林祐子 (1986) Baby Talk の日米比較—日米母親の発話行動の事例的研究—. *東京女子大学附属比較文化研究所紀要*, 47, 121-139.

Lucy, J. A., & Gaskins, S. (2003). Interaction of language type and referent type in the development of nonverbal classification preferences. In D. Gentner & S. Goldin-Meadow (Eds.) *Language in mind: Advances in the study of language and thought*, (pp.465-492). Cambridge, MA.: The MIT Press.

Markman E.M. (1989) *Categorization and Naming in Children: Problem of Induction*. Cambridge, MA.: The MIT Press.

Minami, M., & McCabe, A. (1995). Rice balls and bear hunts: Japanese and North American family narrative patterns. *Journal of Child Language*, 22, 423-445.

Murase, T., & Ogura, T. (2006). Caregivers' speech. In Nakayama, M., Mazuka, R., & Shirai, Y. (Eds.) *Handbook of East Asian Psycholinguistics: Volume 2, Japanese* (pp.20-25). Cambridge, U. K.: Cambridge Univer-

sity Press.

村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (1992). 育児語の研究 (1) —動物名称に関する母親の使用語：子の月齢による違い. *島根大学法文学部紀要文学科編*, 17, 37-54.

村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵 (1998). 育児語の研究 (2). *社会システム論集 (島根大学法文学部紀要社会システム学科編)*, 2, 79-104.

村田孝次 (1960) 育児語の研究—幼児の言語習得の一条件として—. *心理学研究*, 31, 33-38.

Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and systems of thought: Holistic vs. analytic cognition. *Psychological Review*, 108, 291-310.

小椋たみ子・村瀬俊樹・山下由紀恵 (1992). 初期言語発達に関する調査 (1) —幼児語から成人語へ—. *島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)*, 26, 57-63.

小椋たみ子・山下由紀恵・村瀬俊樹 (1991). 初期言語発達インベントリ—信頼性の検討. *島根大学教育学部紀要*, 25, 17-31.

小椋たみ子・吉本祥江・坪田みのり (1997) 母親の育児語と子どもの言語発達, 認知発達. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 5, 1-14.

Pine, J. M. (1994). The language of primary caregivers. In Gallaway, C., & Richards, B. J. (Eds.) *Input and Interaction in Language Acquisition* (pp.15-37). Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.

Rothbaum, F., Pott, M., Azuma, H., Miyake, K., & Weisz, J. (2000). The development of close relationships in Japan and the United States: Paths of symbiotic harmony and generative tension. *Child Development*, 71, 1121

- 1142.
- 佐藤賢輔・針生悦子 (2006). 幼児における助数詞の理解：存在論的カテゴリーに注目して. *発達心理学研究*, 17, 272-281.
- Snow, C. E. (1977). Mother's speech research: From input to interaction. In Snow, C. E. & Ferguson, C. A. (Eds.) *Talking to children*. New York: Cambridge University Press.
- Thiessen, E. D., Hill, E. A., & Saffran, J. R. (2005). Infant-directed speech facilitates word segmentation. *Infancy*, 7, 53-71.
- Toda, S., Fogel, A., & Kawai, M. (1990). Maternal speech to three-month-old infants in the United States and Japan. *Journal of Child Language*, 17, 279-294.
- 友定賢治 (2005). *育児語彙の開く世界*. 大阪：和泉書院.
- 吉田華子 (2006). 語彙学習のメカニズム：学習システム，制約，相関関係学習の仮説—針生論文へのコメント. *心理学評論*, 49, 91-95.
- Yoshida, H. & Smith, L. B. (2003). Shifting ontological boundaries: How Japanese – and English – speaking children generalize names for animals and artifacts. *Developmental Science*, 6, 1-17.